

因幡芝居のこまわい

寛 真理子
(岐阜市歴史博物館学芸員)

今回は、本誌第四号で少し触れた、伊奈波神社前の芝居について取り上げます。写真1・2はいずれも御社宝である伊奈波神社境内図の一部です。1(一八三九年作成)には善光寺の隣に「芝居小屋」が、2(一八五七年作成)には1と同じ位置に檜皮(ひわだ)ぶきらしい大きな建物を確かめることができず、伊奈波神社前は、美江寺観音前とともに江戸時代の岐阜町(今の金華校区)にほぼ当たります。周辺最大の娯楽の場でした。江戸や上方の役者が訪れて歌舞伎を上演し、「因幡(稲葉)芝居」と呼ばれました。

ここでのいろいろな興行については、一九世紀にまとめられた『増補岐阜志略』がくわしく伝えていきます。それによると、延宝四年(一六七六)に宅平という人物が満願寺境内で手芝居・見せ物の興行

を尾張藩から許可されたのが最初です。満願寺は今はありませんが、明治初期の神仏分離まで神宮寺として現在の伊奈波善光寺の東に建っていました。岐阜町の大半を焼き尽くした貞享三年(一六八六)の大火ののち興行は中絶しますが、元禄一〇年(一六九七)に再開し、春秋の彼岸と盆の年三度、人形浄瑠璃もしくは歌舞伎と、見せ物を興行しました(『伊奈波神社志』では元禄一三年のこととしています)。享保二年(一七三六)には大門に板ぶきの水茶屋が建ち、見せ物の興行を許されました。このときに板ぶきの芝居小屋ができたとする論者もあります。

しかし、文化二年(一八〇五)出版の『木曾路名所図会』に掲載された伊奈波神社境内図では満願寺境内に板ぶきの建物はなく、カヤぶきかワラぶきの建物が見える

だけです。道をはさんだ向かいには板ぶきの建物が二軒あり、これは写真1で茶店がある位置に当たります。享保二年から文化二年の間に境内の火災の記録はなく、板ぶきをカヤぶきに建て替えることは考えられませんが、享保二一年の記事は、板ぶきの茶屋が建ち、常設の見せ物興行が認められた(ただし小屋は板ぶきではない)という意味かと思えます。

このうち、元文三年(一七三八)に尾張藩領内で芝居が禁止されたときも、伊奈波神社前は特例として許されました。天明元年(一七八一)五月に加納藩士の田辺昆敏(やすとし)は「岐阜因幡において操り芝居興行」と日記に書いています。彼岸や盆をはずれた五月ですから、このころに時期を限らない興行が行なわれていたことが確認できます。天明五年、凶作と飢饉が続くなかで尾張藩領全体に芝居が改めて禁止されたときには伊奈波神社前の興行も中止されましたが、わずか八年後の寛政五年(一七九三)には春秋の彼



写真(1)



写真(2)



写真(3)

岸と盆の三度に限って再び許可されました。『増補岐阜志略』の記事はここでおわっていますが、年三度という制限は次第にゆるんできたものと思われま。また、黒野村(現在の岐阜市黒野)の庄屋であった伊藤又右衛門の文化五年(一八〇八)の日記には、領主の陣屋があった切通村(岐阜市切通)に行つた帰りにしばしば岐阜町で芝居見物をしており、因幡芝居が岐阜町周辺の人たちの楽しみとなつていたことがうかがえます。

分)、京都出身の初代関三十郎、江戸っ子の熱烈な支持をえた七代目市川団十郎などがおり、五代目松本幸四郎・五代目岩井半四郎も出演したと伝えます。なかでも七代目市川団十郎出演のときのように、共演した三代目中村仲蔵の自伝『手前味噌』からくわしく知ることが出来ます。

大きな目の特徴であった七代目団十郎は、広い役柄をこなし、「歌舞伎十八番」選定や「東海道四谷怪談」の初演などでも知られる、江戸時代の歌舞伎を代表する名優です(天保三年に長男に八代目団十郎を嗣がせて自ら海老蔵と名乗りましたが、ここでは団十郎の名で記述します)。しかし天保一三年(一八四二)に改革令に触れて江戸十里四方追放となり、伊勢や上方などで芝居に出演しました。岐阜に来たのは嘉永二年(一八四九)二月のことで、翌三年正月五日に中村仲蔵が名古屋から合流しました。団十郎が泊まっていたのは「因幡権現の下芝居の隣、大久という茶屋」で、これは

写真1に見える「茶店 大黒や友三郎」を指し、嘉永二年には友三郎から久四郎という人物に替わっていたようです。翌日から「裏表忠臣蔵」の稽古に入り、八日から上演したところ大入り満員。仲蔵は給金の心配をしながらも、出演の合間に美江寺町のひいきに呼ばれたり、加納宿の茶屋で舞踊を見せ、その遊女の芸も見ておもしろがつたりして過ごしていました。

正月一六日に、団十郎が赦免されたとの知らせが江戸から岐阜に届きます。しかし大入りの興行をすぐ止めるわけにはいかず、一日から二二日まで出演してその夜に岐阜を出発しました。仲蔵らは残つて芝居を続けましたが、肝心の団十郎が抜けて見物客も減つてしまいます。しかし三月三日の祭礼までは引き留められ、しばらく芝居をせずに過ごして三月五日から一興行を打ち、四月六日に岐阜を発ちました。この間、祭礼の山車で演じる子ども狂言に稽古を付けていますので、おそらくこの年の祭は一段と上出来

だったことでしょう。

この満願寺境内の芝居小屋は明治初期の神仏分離にもなつて姿を消したのではないかと思われま。それに替わつて明治一〇年(一八七七)前後には、かつて岐阜奉行所があった場所(伊奈波神社の北)に末広座、伊奈波善光寺前に国豊座、神社参道入口南に相生座、その西に栄座など、劇場や寄席が次々と建ち、伊奈波神社周辺は新たなぎわいを見せるようになりま。このうち末広座・国豊座はやはり「いなば芝居」「稲葉桜町国豊座」などと呼ばれていきます。これらの建物では歌舞伎だけでなく軽業・手品・講談・落語・演説会などが催され、伊奈波広小路の仮小屋でもさまざまに見せ物が興行されました。しかし、明治二四年の濃尾震災を画期として、繁華街のぎわいは次第に南下し、大正から昭和にかけて柳ヶ瀬が全盛時代を迎えることになりま。